

公共施設再見

第 1 回 新島村抗火石センター

新島ガラスアートセンター（これは愛称で正式名称は表題のとおり）の 1 日は、朝 8 時 30 分に始業し、まずは溶解炉の点検に入り、前日に仕込んだガラスの原料砂の状態を見る。工房内の清掃をし、9 時からガラス作品の制作となる。昼の 1



時間の休憩を挟んで午後からも同じ作業が続く。見学者の来訪があったときは作業風景を見てもらいながらの施設の説明をする。また、ガラス教室の受講の申し出があるときは午後の作業状態を調整して対応する。4 時半に溶解炉に明日使う分の原料砂を投入（10 時間ほどかけると板材となる）し、様子を確認しながらフロアの片付けをして夕方 6 時頃の帰宅となる。

議員が取材に訪れたときは野田氏（新島ガラス協会の責任者）が個展のための作品を制作中。二手に分かれて作っていたが、あとから合体するのだろうか？時間との闘いもありチームワークは必須で手慣れた様子で呼吸もピッタリ。言うまでもなく施設内は暖かい。この 4 月の時期は丁度よいが、これからは大変だろうな、と少々同情する。工房内は様々な設備が取り付けられていて手狭な風でよくケガをしないものかと気になる。実際、見学者が 30 人を超えると許容できないという。

この施設は新島の南西方面、間々下海岸近くに位置し、目の前には鳥ノ島、その背後に地内島、晴れた日には水平線の彼方に伊豆半島が望見でき、絶好のロケーションにある。昭和 63 年に開設し、すでに四半世紀の歴史を刻む施設はかなり傷んできて雨漏りもあるらしい。開設 30 周年に向けて何らかの処置が期待される。

施設の運営は新島ガラス協会（代表 野田 収）へ委託され、委託料は月額 90 万円、委託の内容はガラス体験教室の開催と指導、これに係わる事



務手続き、見学者に対する対応、あとは施設内の清掃・維持管理となっている。

現在、野田氏他4名のスタッフ、アルバイトを使って運営に当たっている。スタッフは従業員というよりは、クリエイターとして育成する、そういう姿勢で対

応しているという。このため、月々の給料はかなり低めで、村からの運営費のうちから賄い、野田氏本人は作品の売り上げて糊口をしのいでいるよう。

この施設の年間の運営費は3千万円余りで、果たしてこのような経費をかける価値があるのかどうなのか、いつも議論の的になる。毎年文化の日を挟んで開催される『新島国際ガラスアートフェスティバル』は施設の開設当初から始まり、グローバルな人材交流を推進して今では国際的にも名の通った一大イベントの地位を確立している。東京都の評価も高く、ある意味国際化の先駆けとも言える。

地域社会との関わりがうすいとよく指摘されるが、地元の学校の授業時間に組み込まれている。小学校では1年生から6年生まで図画工作の時間にあり、中学では1年生が技術家庭の中で学び、3年生は卒業制作にガラス作品を取り上げてきた。高校では3年生の選択科目として週1回の受講がある。また体験教室は希望に応じて随時開催されているが、年々増加傾向にあり、昨年は1,200人強。これは10年前に比べて倍増している。これに伴う収益は350万円弱で村の歳入になっている（なお、講師の人件費はボランティアとのこと）。

問題の根は発足当初からあり、この施設を産業振興のためのものとみるか、あるいは芸術・文化の育成のためのものとみるか、で異なり比重の置き方でも同様である。また、公共施設であると同時に個人の使用も認めており（当然、使用料を徴収）、この辺りのわかりにくさも禍いしている。

いずれにしても、これまでの積み重ねてきた実績をふまえて開設30周年を一区切りにさらなる発展を目指すにはどのようにしていったらよいか、全村的な議論が必要かと思う。その前に一步現場に足をふみ入れてみてはどうか。千客万来、ウエルカムということだから。